

アノニムス・イアンブリキ研究

その他のタイトル	A Study in Anonymus Iamblich
著者	中澤 務
雑誌名	關西大學文學論集
巻	68
号	2
ページ	57-89
発行年	2018-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/16309

アノニウムス・イアンブリキ研究

中 澤 務

はじめに

本論文では、紀元前5世紀末から4世紀初頭に執筆されたと推定されるソフィスト文書を取りあげ、この時期におけるソフィスト思想のすがたを明らかにする。このソフィスト文書は、ペロポネソス戦争敗戦前後のアテナイ社会の状況を背景に執筆されたと考えられ、それ以前のソフィストたちとは異なる思想の特徴があらわれている。同時期に執筆されたと推定される『ディッソイ・ロゴイ』とならび、ソフィストたちの思想がどのように変容していったかを示す貴重な資料といえる。

このソフィスト文書の断片は、カルキス出身のシリア人哲学者イアンブリコス (A. D. 240頃～325頃) の著作『プロトレプティコス (哲学のすすめ)¹⁾』第20章に含まれているが、その存在は、19世紀末になるまで知られていなかった。この著作は、さまざまな資料からの抜粋にもとづいて、それらを連結して議論が構成されており、引用であることを見抜くことが難しいのである。

ブラスは、この第20章が、ひとつの文書からの抜粋によって構成されていることを見抜き、七つの断片を抽出して、その再構成を試みた (Blass [1889])²⁾。そして、その内容から、これを、紀元前5世紀末にソフィストの影響下で執筆された文書と推定したのである。ブラスによる発見以来、このソフィスト文書の著者は「アノニウムス・イアンブリキ (イアンブリコスの無名氏)」と呼ばれるようになり、研究が進められてきた。現在では、これらの断片は、この時代のソフィストの思想を解明するための重要な資料と認められている。

本論文では、このようなアノニウムス・イアンブリキの思想を検討する。ま

ず1では、7つの断片からなる文書の内容構成とそこにみられる特徴について考察し、アノニウムス・イアンブリキの人物像を明らかにしよう。その後、2～4において、断片から読み取れる彼の思想を詳しく分析していくことにしたい。

1 アノニウムス・イアンブリキの断片と人物像

1.1 断片の内容構成

アノニウムス・イアンブリキの文書は、オリジナルのテキストから忠実に引用されたものとみなすことができる。また、引用の順序も、内容的な連続性からみて、オリジナルの議論のとおりであると考えて問題ないであろう³⁾。

イアンブリコステキストでは、7つの断片の間に、彼による短いコメントが挿入されており、これによって、議論がつけられている。各断片には哲学への言及はないが、イアンブリコスは、コメントにおいて、その内容を、哲学を学ぶ意義に結びつけ、全体を「哲学のすすめ」としてまとめている。しかし、コメント部分を除去して、それぞれの断片をアノニウムス・イアンブリキのオリジナルの議論の一部として再構成していくと、それが「哲学のすすめ」を意図したものというよりは、倫理や政治の具体的問題を論じたものであったことがわかるのである。

そのような具体的問題として、7つの断片は、つぎの4つの主題を論じている。

断片1・2・3：徳の修練とその目的

この部分では、徳の修練とその目的について論じられている。まず、断片1では、知恵や、勇敢さや、弁舌のうまさや、さらには徳の全体と部分を完成させるためには、素質と努力が必要であることが指摘される。続く断片2では、そのような徳の修練においては長い時間をかけることが重要であるとされる。続く断片3では、徳はよき目的のために使用されるべきことが説かれ、そのた

めには、ひとは社会の役に立つ者にならなければならないが、それは、法と正義に従うことによって実現されるのだと主張されている。

断片4・5：自制力について

この部分では、自制力（エンクラテイア）の重要性が説かれている。人々の多くは、徳を手にするために必要な自制力を欠いているが、その原因は、生命と金銭への執着にある。それゆえ、われわれは、それらへの執着を克服すべきだとされる。

断片6：プレオネクシアへの批判

この部分では、プレオネクシア（貪欲）の思想が批判されている。われわれは、貪欲にむさぼる力が徳であり、法に従うのは臆病だと考えてはならない。人間は、共同体なしには生きることができず、法と正義こそが人間を支配する王なのだからである。たとえ、法を無視しうる超人的な人間がいたとしても、そのような人間にとってすら、法に従う方がみずからの利益にかなうのである。

断片7：エウノミアとアノミアについて

この部分では、法が守られているエウノミアの社会と、法が守られないアノミアの社会が比較され、前者では、人々は安心した快適な生活を送ることができるのに対して、後者では、人々は不安で不快な生活を送らざるをえず、社会が僭主独裁制におちいる危険があると警告されている。

1.2 断片の特徴

これらの断片には、どのような特徴がみられるであろうか。大きな特徴として、文体的な特徴と、内容的な特徴を挙げることができる。

文体的な特徴として、まず挙げられるのが、方言の特徴である。この文書は、アテナイで執筆されたものと推定され、アッティカ方言によって書かれてい

る。しかし、そのなかには、イオニア方言の混在がみられるのである⁴⁾。このような現象がなぜ生じたのかについては、さまざまに解釈可能であろうが、筆者は、この文書の執筆者がイオニア方言話者であったという理由が、もっとも妥当なものだと考える。このことは、アノニウムス・イアンブリキのアイデンティティを考える上で、重大なヒントとなるであろう。

もうひとつの文体的特徴として、弁論術的な技巧を指摘することができる。すなわち、この文書には、当時のさまざまなレトリックが散りばめられており、技巧的な文章として構成されているのである⁵⁾。このような特徴からみて、アノニウムス・イアンブリキが、弁論術の本格的な訓練を受けていたことは明らかである⁶⁾。おそらく、彼は、ほかのソフィストたちと同様に、弁論術の教育にたずさわり、みずからもこのような技巧的な文書の著述をおこなっていたのであろう。また、このような弁論術の特徴から、この文書が、エピダイクシス（模擬演説）として執筆された可能性も十分にある。

この文書がもつ特徴は、文体的なものばかりではない。内容的にも、この文書は、きわだった特徴を持つ。すなわち、同時代の紀元前5世紀の思想家たちとの共鳴である。アノニウムス・イアンブリキの提示する論点は、同時代の多様な思想家たちの発言と符合し、重なっているのである（具体的な符合関係は、2節以降の議論で指摘する）。こうした符合関係は、アノニウムス・イアンブリキが、紀元前5世紀において広く共有されていた倫理的・社会的文脈のなかで思考しており、同時代の価値観や問題意識を、ほかの思想家たちと幅広く共有していたことを示しているように思われる。

以上のように、この文書が持つ特徴から、アノニウムス・イアンブリキという作者の姿が見えてくる。そこで、つぎに、アノニウムス・イアンブリキの人物像を考察しよう。

1.3 アノニウムス・イアンブリキの人物像

アノニウムス・イアンブリキという人物は、いったい、どのような人物だっ

たのであろうか。研究者たちは、既知の思想家たちのなかにアノニウムス・イアンブリキを探し出そうとして、その同定をめぐる論争をくりひろげてきた⁷⁾。

この論争のなかで、多数の既知の思想家たちが、思想の共通性から、その候補として挙げられてきた。しかし、その大部分については、思想の符合は部分的なものにすぎない。そのような思想家として、われわれは、アンティフォン⁸⁾、ゴルギアス⁹⁾、クリティアス¹⁰⁾、プロディコス¹¹⁾などのソフィストたち、アルケラオス¹²⁾、アンティステネス¹³⁾などの哲学者たち、さらにはテラメネス¹⁴⁾などの政治家を指摘することができる。これらは、過去に、アノニウムス・イアンブリキの候補として名前の挙げられてきた思想家たちであるが、いずれも部分的な共通性しかなく、アノニウムス・イアンブリキ本人とは認められない。

それでは、これよりも幅広い符合がみられる思想家については、どうだろうか。たしかに、同時代の思想家のなかには、そのような思想家が存在し、彼らは、多くの研究者たちによって、アノニウムス・イアンブリキであると主張されてきた。そのような思想家として、われわれは、ヒッピアス¹⁵⁾、プロタゴラス¹⁶⁾、デモクリトス¹⁷⁾の名を挙げることができる¹⁸⁾。では、われわれは、アノニウムス・イアンブリキは、このうちのいずれかだとすることができるだろうか。

このうち、ヒッピアスについては、その可能性は低い。ヒッピアスを候補とする主要な根拠は、アノニウムス・イアンブリキの法概念が、ヒッピアスと同じく自然法を基盤にしたものだという解釈にある。しかし、後に論じるように、アノニウムス・イアンブリキの法概念は、じっさいには、そのようなものだと考えられない。それゆえ、ヒッピアス説を支持する根拠は薄いといわざるをえないのである。

これに対して、プロタゴラスとデモクリトスは、これまで、もっとも多くの支持を集めてきた思想家であり、その符合関係は、広汎なもの認められる。しかも、プロタゴラスとデモクリトスは、いずれもイオニア都市のアブデラ出身であり、倫理思想において、強い影響関係があったと考えられている。じっ

さい、アノニウムス・イアンブリキの論点は、これらふたりの思想家の論点と、多くの点で、共通の重なりを示しているのである。

それでは、アノニウムス・イアンブリキを、このふたりのいずれかとしてよいのだろうか。それもまた難しいのである。なぜなら、たしかに、アノニウムス・イアンブリキとふたりの間の思想的符合は広汎であるが、また他方で、その議論には、ふたりには見られない独自の論点が存在しているからである。彼の議論は、たしかに、当時の多くの思想家たちの影響を受けているが、全体としてみれば、ほかのどの思想家とも異なる、オリジナルなものと評価すべきなのである。

以上から、われわれは、アノニウムス・イアンブリキの人物像を、以下のように推測する。

アノニウムス・イアンブリキは、紀元前5世紀の思想家たちから多様な影響を受けた未知のソフィストであり、とりわけ、プロタゴラスやデモクリトスなど、アブデラの思想風土からの強い影響を受けている。彼は、おそらくは、アブデラの出身者であり、プロタゴラスやデモクリトスなどアブデラの知識人たちと深く交わり、その思想を形成していったのであろう。おそらく、彼は弁論術の教育を受け、やがて、ソフィストとして、アテナイで活動するようになった。そして、アテナイの知識人たちと交流し、さまざまな影響を与えたのである¹⁹⁾。

彼の残した文書は、そのような活動のなかで、アテナイにおいて執筆されたと推測される。この文書の記述から推測されるように、その当時のアテナイの社会状況は、社会的安定が崩れはじめ、社会的階層対立が深刻化し、プレオネクシアを認めるような利己主義的倫理が横行していた。彼は、そのような社会状況が、僭主独裁を引き起こすことを憂慮しており、ここから、時代はペロポネソス戦争末期か、あるいは敗戦後であったと推測できる。それゆえ、執筆の時期については、一般に推測されているとおり、紀元前5世紀末から紀元前4世紀初頭にかけてであるとするのが妥当であろう²⁰⁾。

以上で、この文書の著者をめぐる全体像が明らかになったので、次節以降では、アノニウムス・イアンブリキの思想を分析し、その特質を明らかにしていくことにしよう。

2 アノニウムス・イアンブリキの徳の理論

2.1 徳の教育

断片1～3において、アノニウムス・イアンブリキは、徳を手に入れるための方法を論じている。

彼はまず、徳を獲得するためには、素質と努力というふたつの要素が必要だと説く（断片1(2)）。このうち、素質のほうは、運がよくなければ手に入れることはできないが、努力のほうは、どのようなひとでもおこなうことができる。その努力の内容として彼が挙げるのは、(1) 立派でよいものを欲し求めること、(2) 労苦をいとわないこと、(3) できるだけ早期に始めること、(4) 長期間継続することの四つである。彼によれば、素質に加えて、これら四つをすべておこなったとき、ひとははじめて徳を手にすることができるのである。

徳の獲得のために、素質と努力というふたつの要素が必要とされることは、プロタゴラスが強調しており²¹⁾、ここでのアノニウムス・イアンブリキの発想も、その影響を受けていると考えられる。このとき、素質は自然（ピュシス）に、努力は人為（ノモス）に相当しており、そこには、徳は、人間の自然と人為がひとつになり、自然が人為によって強化されるとき、はじめて完成するという考え方を見ることができる。

アノニウムス・イアンブリキの挙げている努力の内容は、当時、標準的なものであった。まず、(1) の立派でよいものを欲し求めるという要素は、プロタゴラスとデモクリトスにおける倫理の中核となるものであり、彼らの快樂主義的傾向と符合する²²⁾。(2) の労苦をいとわないという条件は、紀元前5世紀以前から存在する伝統的価値観であり、すでにヘシオドスに、労苦を価値あるも

のとする姿勢がみられる（『仕事と日』287行以下）。このような伝統的価値観は、ソフィストに受け継がれ、当時は標準的な価値観となっていた。(3) および(4)についても、プロタゴラスとデモクリトスに、同様の発想が見出される²³⁾。

以上のように、アノニウムス・イアンブリキの教育観は、紀元前5世紀の標準的な考え方であり、彼がプロタゴラスやデモクリトスからの影響を強く受けていることがわかる。

2.2 徳の内容

では、アノニウムス・イアンブリキが、徳は素質と努力によって獲得できると主張するとき、具体的にどのような能力を念頭にしていたのであろうか。

彼は、断片1(1)において、そのようなものとして、①知恵、②勇敢さ、③弁舌のうまさ、④徳の全体、⑤徳の部分、という五つのものを列挙している。

これらのうち、①～③は、具体的な性質や能力であるが、④⑤は具体的な能力ではなく、前三者とは明らかに異質なものである。では、①～③と④⑤の関係は、どのようなものなのだろうか。以下では、いくつかの解釈を検討していこう。

解釈1 アノニウムス・イアンブリキが徳と考えているのは、知恵、勇敢さ、弁舌のうまさの三つである。徳の全体とは、これら三つの集合体であり、徳の部分とはこれら三つのそれぞれである²⁴⁾。

知恵、勇敢さ、弁舌のうまさという三つは、紀元前5世紀において、有能な政治家に必要とされる三つの重要な能力とみなされていたものである。その場合、アノニウムス・イアンブリキは、徳とはそのような政治的能力のことであり、それらだけが徳だと考えていたことになるだろう。

しかし、この解釈には問題がある。というのも、紀元前五世紀は、市民が身

につけるべき徳として、政治的能力だけでなく、倫理的徳が重視された時代であり、ソフィストたちも、そのような価値観を共有しているからである。アノニウムス・イアンブリキへの影響の強いプロタゴラスも、正義や節度などの倫理的徳を重視している（*Prt.* 322d ff）。彼によれば、そのような倫理的徳は、人間がゼウスから与えられた道義心や謙讓心から生じたものであり、社会で生きていくために不可欠の能力なのである。

もし、アノニウムス・イアンブリキが、徳を知恵、勇敢さ、弁舌のうまさという三つに限定し、倫理的徳を徳として認めていなかったのだとしたら、彼の態度は、プロタゴラスをはじめとする当時の標準的な徳の理解から離反していたことになる。だが、同時代のソフィストたちと多くの部分で枠組を共有している彼が、何が徳なのかに関して、大きくかけ離れた理解をしていたとは考えられない。

解釈1には、さらなる問題がある。アノニウムス・イアンブリキは、断片1・2において徳の教育のありかたを論じると、今度は、断片3において話題を転じ、徳を獲得しても、それだけでは十分ではないと主張しはじめる。彼によれば、徳は、よき合法的な目的のために使用されてこそ、完全なよきものとなるのであり、悪しき目的のために使用されれば、逆に悪いものになってしまうという。そして、彼によれば、徳のある者が持つべきよき目的とは、法と正義の手助けをすることによって、人々に善をなすことなのである。

ここからわかるように、彼は、徳を、法や正義に関連づけて理解している。彼は、正義や節度などの倫理的徳について明確な言及はしていないが、そのような徳の存在を念頭にして議論しているのだと考えることができるだろう。

この場合、アノニウムス・イアンブリキが倫理的徳の名を明確に挙げていない理由が問題となる。これについては、アノニウムス・イアンブリキの論考の主題によるものだと考えたい。彼の論考の主題は、社会にとって有用な徳のありかたにあり、彼はこの主題を、政治的活動の場面を念頭にして論じている。それゆえ、彼の議論では、知恵、勇敢さ、弁舌のうまさという政治的徳のあり

かたが中心的な論点となり、倫理的徳は、政治的徳を真によきものにするための条件として、背景に退くことになるのである。

このように、アノニウムス・イアンブリキは、倫理的徳の存在を念頭にした議論を展開しており、解釈1は誤りである。そこで、これに対する批判から、次のような解釈2が提示された。

解釈2 アノニウムス・イアンブリキが徳と考えているのは、「徳の全体と部分」であり、それは倫理的徳のことである。これに対して、知恵、勇敢さ、弁舌のうまさは、徳ではなく、たんなる能力や性質とみなされている²⁵⁾。

この解釈によれば、五つの要素のうちで徳と認められているのは、「徳の全体と部分」と呼ばれている倫理的徳のみであり、それらは善と結びついているがゆえに、悪用される可能性がない。これに対して、知恵、勇敢さ、弁舌のうまさは、善と必然的に結びついているわけではなく、悪用される可能性がある。それゆえ、これら三つは、たんに優れた能力や性質を意味しているにすぎず、徳とはみなされていないというのである²⁶⁾。

だが、われわれは、この解釈も支持することができない。なぜなら、この解釈では、今度は、アノニウムス・イアンブリキが、政治的能力を徳とみなしていないことになってしまい、ふたたび、当時の標準的な徳の理論から離反していることになってしまうからである。

断片1～3では、あきらかに、知恵、勇敢さ、弁舌のうまさという三つの政治的能力の修練のありかたが中心的主題となっており、徳という言葉は、なによりも、これらの能力に結びつけられている。いずれにせよ、文脈的にみれば、ここで言及されている五つの要素は、すべて、素質と長期間の修練が必要とされる徳とみなされていると考えるのが、もっとも自然な読み方なのである²⁷⁾。

このように、われわれは、政治的能力も倫理的能力も、いずれも徳とみなさ

れていると考えなければならない。これを可能にするのが、筆者の提示する解釈3である。

解釈3 アノニウムス・イアンブリキは、知恵、勇敢さ、弁舌のうまさという政治的徳だけでなく、倫理的徳の存在も認めている。「徳の全体と部分」とは、それらすべての徳を含み込む総称的な表現である。

すでに指摘したように、断片1～3におけるアノニウムス・イアンブリキの関心は、政治的徳の獲得とその発揮による、よい社会の実現にある。それゆえ、この論考に登場する徳は、必然的に、知恵、勇敢さ、弁舌のうまさを中核にしたものとなる。しかし、その背後には、そのような徳を、いかによき目的のために使用するかという問題が存在しており、そこでは、法と正義という、倫理的徳にかかわる価値が重要となるのである²⁸⁾。

このように、アノニウムス・イアンブリキにおける徳とは、政治的徳と倫理的徳をあわせ含むものであり、「徳の全体と部分」という言葉によって、そのような多様な徳の集合体が意味されているのだと考えることができるのである。

2.3 徳の全体と部分

アノニウムス・イアンブリキは、このような徳の集合体を言い表すために、「徳の全体と部分²⁹⁾」という表現を用いているが、この表現も、徳をめぐる当時の論争と密接に関係していると考えられる。

プラトンの『プロタゴラス』において、ソクラテスは、プロタゴラスの徳の理論に疑問を投げかけている（329b ff.）。すなわち、プロタゴラスは、徳を全体としてひとつであるとしながら、そこには正義、節度、敬虔などの部分があるとされているが、では、徳のさまざまな部分の関係はどのようなものであり、それらは、全体としての徳と、どのような関係にあるのだろうか。たとえば、それは、顔とその部分（口、鼻、目、耳）のような関係にあり、それぞれの部

分のあいだには、なんの類似性もないのだろうか。それとも、それは、金塊の部分のように、部分間においても、部分と全体においても、大きさ以外は、なんら違いのないものなのであろうか。

以上の問いに対するプロタゴラスの答えは、徳の全体と部分とは、顔の全体と部分のようなものだというものであった。これに対して、ソクラテスは疑問を投げかけ、それぞれの徳のあいだには、その性質に密接な類似性があるのではないかと主張する。そして、その議論は、それぞれの徳はみな同じものであり、ひとつの全体であるという、徳の一性の主張に帰結していくことになるのである。

プラトンが残しているこの議論は、プロタゴラスの時代に、さまざまな徳の関連性をめぐる議論が存在していたことを示している。そして、それぞれの徳は互いに独立的であり、類似性はないというプロタゴラス的見解と、それぞれの徳のあいだに密接な関係を認める立場が存在していたと考えることができる。そして、このような視点から、アノニュームス・イアンブリキの議論を見ると、彼もまた、そのような徳の部分性と全体性を問題にしていることがわかるのである。

アノニュームス・イアンブリキの場合、徳の統一性をもたらすのは、それが使用される「よき合法的目的」であり、それは法と正義に関連づけられていた。彼の考え方では、徳は個別的であるが、それらが法と正義にしたがうとき、それらは完全によきものとなる。これは、すべての個別的な徳がしたがうべき共通の価値があり、その共通の価値のもとで、さまざまな徳はひとつにまとまるということを意味している。彼は、政治的徳の上位にある社会的価値（法と正義）を想定し、この価値によって、徳の統一性を保証しようとしているのである。

このような発想は、プラトンの発想に通じるものといえるが、彼の発想には、プラトンとは異なる側面がある。プラトンにおいては、正義などの共通の価値が、すべての徳に、本質として内在しており、その共通の価値ゆえに、それぞれの徳は、本質的に同一である。これに対して、アノニュームス・イアンブリキ

においては、徳を統合する価値は、外在的なものである。すなわち、さまざまな徳が持つよさは、それぞれの徳に固有のものであり、法や正義は、そこに本質的な価値として内在しているわけではない。法や正義は、それぞれの徳固有のはたらきとしてではなく、その徳を社会的に使用するとき、その使用の文脈においてはじめてすがたをあらわすものである。それゆえ、彼においては、徳は、よきものでありながら、それを悪用するということが可能になるのである。

以上のように、徳の一性をめぐるアノニウムス・イアンブリキの考えかたは、プロタゴラスとも、プラトンとも異なるものであり、プラトンの理論が登場する以前に、ソフィストたちによってどのような理論が唱えられていたかを示しているのである。

2.4 名声とねたみ

徳をめぐるアノニウムス・イアンブリキの考えかたには、ほかにも、ソフィスト的な特徴を見ることができる。

ひとつは、名声とねたみという主題である。断片2から明らかなように、アノニウムス・イアンブリキが徳の修練を重視するのは、なによりも、それが名声をもたらすからである。彼にとって、徳の修練は、名声の獲得をもって、はじめてその目的を達するものなのであり、名声を得られなければ、無意味なものになってしまうのである。彼は、断片5において、生きながらえるよりも、生命を捨てて永遠の名声を勝ちとるほうが重要だと述べており、彼にとって、名声は、生命の価値をも超えるものであったことがわかる。

このような名声を最高の価値とする価値観は、ホメロスの時代から存在する伝統的な価値観であるが、紀元前5世紀の社会においても存続している。アノニウムス・イアンブリキの考えかたは、このような伝統的な価値観にしたがって徳の理論を提唱したソフィストたちに共通する、典型的な議論であるといえるだろう³⁰⁾。

当時、この名声の問題と密接に関係して論じられるようになったのが、ねた

みをめぐる問題である。ねたみをめぐる問題は、この時代において多くの発言がみられ³¹⁾、当時の代表的な倫理的問題であったと考えられる。

アノニウムス・イアンブリキによれば、ひとびとは、ねたみゆえに、ひとを誉めたり評価したりしたからず、正義に反した虚偽の告発をしてしまうこともある(断片2(2))。ひとびとがそのようなふるまいをするのは、他人に名誉を与えることは、心地よいものではないからである。それゆえ、われわれは、ひとびとが名誉を認めるようになるまで、長い時間を費やさなければならないのである(断片2(3))。このような、ねたみをめぐるアノニウムス・イアンブリキの考えかたは、トゥキュディデス(2.35.2)におけるペリクレスの発言と類似していることが指摘されており³²⁾、彼の発想は、当時、広く共有されたものであったと考えることができる。

では、その問題に対して、アノニウムス・イアンブリキは、どのように対処しようとしているのだろうか。彼の考えかたの特徴は、見せかけの名声と真実の名声を区別する点にある。たしかに、ひとびとは他人に名声を与えることを嫌い、警戒をする。だが、そのような否定的な効果が生じるのは、短時間で徳があると思わせようとするからにはかならない。ひとは、そのような短時間で得られる見せかけの名声ではなく、長い時間をかけて完成される真実の徳を身につけることによって、真実の名声を手にすることができるのである。アノニウムス・イアンブリキは、名声はドクサ(思わく)であり、不確実で危ういものだという当時の考えかたに対して³³⁾、そのようなドクサ的なものを、真実のものにする方法を提示しているのである。

2.5 徳と共同体

アノニウムス・イアンブリキのもうひとつのソフィスト的特徴は、徳を使用するさいの目的として、共同体の善の促進を挙げ、その具体的な内容を考察している点にある。

アノニウムス・イアンブリキは、「徳全体を欲する者がもっともよき者とな

るためには、どのような言葉と行為が必要か」と問い、その答えとして、「大多数の人々にとって利益となる人物が、そのようなものであろう」と主張している（断片3(3)）。では、「大多数の人々にとって利益となる」とは、いったいどのようなことなのであろうか。この問いに対して、アノニウムス・イアンブリキは、人々に金銭を与える行為がそれだと考えてはならないと主張している。このような慈善行為への批判は、ほかのソフィストたちにはみられない独自の論点といえるが、どうして、アノニウムス・イアンブリキは、慈善行為を批判するのであろうか。

その理由のひとつとして、われわれは、当時の社会的状況を考えることができるであろう。当時は、貧富の拡大のなかで、富裕者層と貧民層の対立が顕著になっていた時代であった。そのような状況の中で、貧民層に金銭を与えることによって、みずからの勢力を強めようとする富裕者たちが多数存在したことであろう。アノニウムス・イアンブリキは、そのような社会状況のなかで、たんに金銭を与えるだけでは、社会的対立が解消されて、社会が安定することはないのだと考えているのである。

このような方法に対して、アノニウムス・イアンブリキが望ましいと考える方法は、徳の力によって、法と正義の手助けをして、社会的統合を図るというものである。彼は、断片7(1)(2)において、そのような方法で実現される社会的統合について論じているが、そこで鍵となるのは、信頼関係である。すなわち、社会的統合が実現して、法が守られれば、そこに信頼関係が生まれ、それによって、貧しい者は、富裕者からの援助を得られるようになるのである。

ここからわかるように、アノニウムス・イアンブリキは、金銭的な援助そのものを否定しているわけではない。彼が批判しているのは、信頼関係のない社会において、金銭で信頼を買おうとする富裕者たちの態度なのであり、そのような当時の社会のあり方に対して、法が守られる社会を作り出し、社会的信頼関係を実現することの重要性を説いているのである。

以上のように、アノニウムス・イアンブリキにとって、徳の目的は、社会的

統合を作り出すことにある。そして、そのような目的のもとで徳が発揮される
とき、それは、真の意味での名声をもたらすことになるのである。

3 アノニユムス・イアンブリキの倫理思想

3.1 自制力

断片1～3においては、徳をめぐる考察が展開されたが、断片4～6では、
人間の行動のありかたをめぐる倫理的考察が展開されていく。

まず、断片4・5において、アノニユムス・イアンブリキは、徳の獲得のた
めに必要な倫理的気質である自制力（エンクラテイア）をめぐる問題を考察し
ている³⁴）。

アノニユムス・イアンブリキによれば、徳を獲得するためには、金銭の誘惑
と生命への執着のうち勝つ自制力が必要だが、大多数の人々は、このふたつの
ものに対して自制力を欠いている（断片4(1)）。では、どうして人間は、これ
らふたつの事柄に対して、自制力を持ってないのであろうか。彼によれば、その
原因はふたつある。

ひとつは、自己のたましい（ $\psi\upsilon\chi\eta$ ）への執着である（断片4(2)）。ここで
たましいと言われているのは、個々の人間の意識や自我に相当するようなもの
だと考えることができる。人間にとって、そのような意識や自我は、いのち
（ $\zeta\omega\eta$ ）そのものであり、人間にとって、もっとも愛着のあるものなのである。
それゆえ、人間は、自分のたましいに執着し、それを失うことを恐れるのであ
る。

彼によれば、金銭への執着も、その多くは、このような自己への執着に由来
している。金銭は、自己の生命を脅かす病気や、老いや、さまざまな災いへの
備えとなるものだからである（断片4(3)）。さらに、それだけでなく、金銭へ
の執着は、名声への欲望からも生まれてくる。なぜなら、他人と張り合ったり、
権力を得たりするためには、金銭が必要となるからである（断片4(5)）。

以上のように、アノニウムス・イアンブリキによれば、たましいと金銭への執着は、人間にとって、名声と徳を追い求めるさいの障害となるものだが、彼は、これらを克服するための具体的な手立てを提示しているわけではない。その克服のためには、徳をみがく修練を積み重ねるしかないということであろう。

ただ、彼は、断片5において、たましいへの執着について、興味深い発言をしている。すなわち、彼はそこで、たましいに執着することは合理的なのかと疑問を投げかけるのである（断片5(1)）。彼によれば、もし人間が、他人に殺されないかぎり、老いることも死ぬこともない存在だとしたら、たましいに執着することは理解できる。だが、人間がいのちを長らえても、そこに待つのは、老いと死である。それゆえ、われわれは、不名誉をこうむってまで、いのちを長らえようとするべきではなく、むしろ、たましいと引き換えに、永遠の名誉を残すべきなのである（断片5(2)）。

このように、アノニウムス・イアンブリキは、功利主義的観点から、自己の生命に固執することの合理性を問うている。そして、生命に固執することによって得られるメリット（不老や不死）などは存在せず、逆に、それは、徳と名声の獲得の妨げになるというデメリットを持つがゆえに、そこに合理性は存在しないと結論づけるのである。

アノニウムス・イアンブリキの考え方は、生命という人間的価値を超越する点で、ソクラテスの倫理に近いと思われるかもしれない。しかし、彼が想定する価値は、あくまでも名声という人間的価値なのであり、彼は、そのような価値と、生命という価値の大きさを比較し、その選択の合理性を問うているのである。その意味で、彼の思考方法は、典型的にソフィスト的なものだといえるだろう。

3.2 プレオネクシア

アノニウムス・イアンブリキが強調するもうひとつの倫理が、プレオネクシア（貪欲）の禁止である。このプレオネクシアは、紀元前5世紀に次第に問題

化してきたものであり、とりわけ世紀末には、深刻な倫理的問題となっていたと考えることができる³⁵⁾。

これがどのような考えかたであったのかについては、プラトンに詳しい説明を見出すことができる。『ゴルギアス』において、カリクレスは、プレオネクシアをする力を持つことこそが徳であり、そのような徳を持った強者であれば、法を無視して不正をおこなうべきだと主張している³⁶⁾。ここでのカリクレスの発想は、断片6(1)におけるアニュムス・イアンブリキの批判と合致するものであり、プラトンは、この時代の思想を、カリクレスに正確に語らせていることがわかる。

この作品のなかで提示されているプラトンの批判は、「魂の調和」という発想にもとづいている。すなわち、彼によれば、法に従う者の魂は調和しているが、プレオネクシアをおこなう不正な人間の魂は調和が破壊されており、そのような人間は、不幸であわれな人間なのである³⁷⁾。

このようなプラトンの批判と比べると、アニュムス・イアンブリキの批判には、プラトンとは異なる独自の批判の視点がみられる。その批判は、プラトンによる本格的な批判が展開される以前の紀元前5世紀末に、どのような批判がなされていたかを示すものといえる。以下、その特徴を考察していくことにしよう。

論点①：法と自然

アニュムス・イアンブリキの批判の論点はふたつある。そのひとつは、法と正義の拘束力が、人間社会においていかに強力なものであるかを示すことである。そのために、彼は、社会の起源をめぐる考え方を提示している。それによれば、人間は単独で生きていくことができないがゆえに、必要から社会を形成し、さまざまな生活の技術を獲得した。ところが、その社会を維持していくためには、人間は、法に従わなければならないのである。それゆえ、彼は、法と正義こそが人間を支配する王なのだと主張する（断片6(1)）。

アノニウムス・イアンブリキによる社会の起源の説明は、プロタゴラスの社会理論に由来するものである。プロタゴラスの社会理論は、ペリクレス時代のアテナイの民主制を正当化するための理論であったと考えられ、『プロタゴラス』においては、民主制社会における徳の教育の正当性を示すために提示されている。アノニウムス・イアンブリキは、それを、プレオネクシア批判の根拠を示す理論として、新たな観点から読み換えて、みずからの議論に取り込もうとしたのであろう。

それゆえ、アノニウムス・イアンブリキの議論には、プロタゴラスには見られない論点を見ることができる。すなわち、法（ノモス）と自然（ピュシス）の固い結びつきという論点である。たしかに、プロタゴラスにおいても、ノモスとピュシスをめぐる問題は重要な問題であった。しかし、プロタゴラスの社会理論の中では、両者の関係は、明確に論じられてはいない。アノニウムス・イアンブリキは、プロタゴラスの理論のなかに、当時さかんに議論されていたノモスとピュシスをめぐる考察を導入し、両者を統合する視点を取り入れようとしたのではないだろうか。

それでは、法と自然をめぐるアノニウムス・イアンブリキの考え方は、どのようなものだったのだろうか。彼は、つぎのように述べている。

……法と正義こそが、人間を支配する王なのであり、これらを別のものにおきかえることなど、けっしてできないのである。なぜなら、それらは、自然によって、かたく結びつけられているのであるから（断片6(1)）

彼は、法と正義が人間を支配する王であることの根拠を、「それら」が自然によってかたく結びつけられているという事実にも求めている。このとき、「それら」という代名詞によって指示されているのは何であろうか。

まず、われわれは、「それら」が「法と正義」を指しているとはできない。なぜなら、法と正義が結びついていることは、自然を持ち出すまでも

なく、明白なことであるし、さらに、この解釈では、法と正義が「人間を支配する王」であることの理由が説明されないからである。この難点を回避するためには、われわれは、「それら」によって「法と正義」と「人間」が意味されており、アノニウムス・イアンブリキは、この両者の固い結びつきを主張しているのだと考えなければならない。

では、「法と正義」を「人間」と固く結びつけている自然とは、いったい何であろうか。ひとつの可能性は、自然を、人為を超えた普遍的な原理として理解することであろう。すると、ここでアノニウムス・イアンブリキは、通常の実定的なノモスではなく、人類に普遍的な法や正義を念頭にしており、自然法の発想に近い考え方を提示していることになる。このような解釈から、ある研究者は、アノニウムス・イアンブリキが自然法思想を抱いていると主張した³⁸⁾。

しかし、このような解釈には問題がある。議論のなかで、アノニウムス・イアンブリキが一貫して問題にしているのは、特定の共同体のなかに存在する法と正義に従うことであり、その背後に自然法が存在するという発想をみることは難しいのである。

むしろ、われわれは、ここでの「自然」も、プロタゴラスが語っているような意味での自然、すなわち「人間的自然 (human nature)」として理解するべきであるように思われる³⁹⁾。プロタゴラスの議論では、人間は、その弱さから共同体を形成しようとしたが、社会性を持たないがゆえに失敗し、それゆえ、ゼウスが人間に社会的な性質を与えることによって、はじめて共同体を形成できるようになった。プロタゴラスにおいては、人間的自然には、すでに社会性が組み込まれており、この人間的自然をとおして、ノモスとピュシスはひとつに結合することになると考えられる。だが、プロタゴラスは、この点を明確に述べているわけではない。アノニウムス・イアンブリキは、プロタゴラスにおいて萌芽的に存在していたこの発想を明確にし、法と人間的自然を調和的なものとして提示することによって、プレオネクシア批判の根拠にしようとしたのではないだろうか。

論点②：「鋼の男」の思考実験

アノニウムス・イアンブリキのもうひとつの批判の論点は、そのような人間の自然を超越した「鋼の男」が現れたらどうなるかという思考実験である⁴⁰⁾。そのような超人が存在しうると仮定したとき、はたして、プレオネクシアは正当なものとなりうるのであろうか。

この問いに対して、アノニウムス・イアンブリキは、そのような超人にとつてすら、法に従うほうが有益なのだと答えている。彼によれば、人間はみな、法にしたがうように生まれついているがゆえに、超人は社会全体の敵となり、一致団結した人々によって、うち負かされてしまう。それゆえ、超人であっても、法と正義にしたがうほうが得策であり、そのような行動をとってこそ、安全を保つことができるというのである。

以上のように、アノニウムス・イアンブリキの第二の批判は、法を守る大衆のほうが「鋼の男」よりも強いという論点に依拠しているが、われわれは、これとほぼ同様の論点が、プラトンの議論にも登場している点に注目すべきである。『ゴルギアス』において、強者はプレオネクシアをしてもかまわないと主張するカリクレスに対して、ソクラテスは、ここで提示されているのと同様の観点から、ほんとうに強いのは、カリクレスの言う強者なのか、それとも大衆なのかと問い、大衆のほうが強いのだということを、彼に認めさせている⁴¹⁾。このソクラテスの反論の背後に、アノニウムス・イアンブリキによる批判の発想があることは明らかである。アノニウムス・イアンブリキがプラトンに直接影響を与えたのかは定かではないが、少なくとも、この時代にはすでに、プラトンのプレオネクシア批判の論点が広く議論されていたことは、確かであると思われる。

以上、われわれは、アノニウムス・イアンブリキのプレオネクシア批判の議論を検討した。アノニウムス・イアンブリキによる批判は、紀元前5世紀末の社会的状況を反映したものであり、彼は、それをプロタゴラスの社会理論を応

用することによって、批判しようとしている。彼の解決法は、人間の社会的本性を根拠にして、法の絶対的な力を強調するものであり、プレオネクシアの禁止を、人間の社会的本性とそこから生じる利益という観点から正当化しようとするものだといえる。「鋼の男」の思考実験においても、彼は、これと基本的に同じ線で功利主義的な解決を図ろうとしており、彼の解決法は、ソフィストの伝統的な発想に即したものだといえるだろう。紀元前5世紀末に存在していた、このようなプレオネクシア批判の発想が、その後プラトンに影響を与え、プラトン独自の批判に発展していったのだと考えることができる⁴²⁾。

4 アノニュムス・イアンブリキの社会思想

4.1 エウノミアとアノミア

断片7では、社会をめぐるアノニュムス・イアンブリキの思想が展開される。そこでの中心テーマとなっているのは、法が守られているエウノミアの社会と、法が守られていないアノミアの社会の姿である⁴³⁾。そこでは、このエウノミアとアノミアの社会が具体的に論じられているが、そこには、この文書が執筆された時期のアテナイ社会の状況が反映されていると考えられる⁴⁴⁾。とりわけ、アノミアの結果としてもたらされる僭主独裁制をめぐる彼の記述には危機感が漂っており、当時のアテナイの社会的現実を彷彿とさせる記述となっている。

それでは、アノニュムス・イアンブリキは、エウノミアを、どのような社会状態として描写しているのでしょうか。以下、具体的に検討していくことにしよう。

社会的信頼と経済

アノニュムス・イアンブリキの考えるエウノミアの社会とは、社会的な安定が実現し、あらゆる階層の市民たちが、安心して暮らしていける社会である。彼は、そのような社会的安定をもたらす要因として、エウノミアによって生ま

れる社会的信頼関係を強調している。彼によれば、この社会的信頼関係の成立により、金銭は共有物となり、社会のなかで循環するようになる（断片7(1)）。この発言は、紀元前5世紀のアテナイ社会における貨幣経済の成立と、経済的発展を背景にしたものであろう⁴⁵⁾。そして、そのような経済的基盤によって生まれた社会的信頼関係は、社会階層間の良好な交流関係を生み出し、その結果、すべての階層の人々が、安全と利益を手にすることができるのである。

われわれは、このような経済を基盤とした彼の社会像のなかに、ペリクレスの影響を見て取ることができる。彼は、ペリクレス時代の経済的状况を念頭に、ペリクレスが目指したような社会をモデルにして、理想的な社会像を描いているように思われる⁴⁶⁾。

また、ここでアノニウムス・イアンブリキは、富裕層と貧困層の間の融和と調和的關係の成立を、エウノミアの社会の帰結と考えているが、彼がこのような社会階層の調和を唱えるのも、彼の時代における経済的状况の変化と、それに伴う階層間の対立の悪化が背景にあるのだと考えることができるだろう⁴⁷⁾。

プラーグマタとエルガ

アノニウムス・イアンブリキは、エウノミアが実現された社会において、人々は不安のない安心した生活を送ることができると考えているが、そのさい、「プラーグマタ（πράγματα）」と「エルガ（ἔργα）」というふたつの概念を対比させて考察している。彼によれば、エウノミアの社会では、人々はプラーグマタのために時間を浪費せずすみ、エルガに専念できる。そして、プラーグマタを思案するのは、人間にとってもっとも不快であり、エルガの思案をすることは、もっとも快いことなのである（断片7(3)(4)）。

このプラーグマタとエルガは、これまで、政治に関わる公共的事柄と、生活に関わる個人的事柄という対比として理解されてきた。だが、そのように解釈すると、アノニウムス・イアンブリキは、政治に関わることを望ましくないことと考えていることになる⁴⁸⁾。ここから、アノニウムス・イアンブリキは政治

を否定的に捉えており、政治から距離を取ろうとしていると考える研究者もある⁴⁹⁾。しかし、このような理解は間違っているように思われる。なぜなら、彼は、断片1～3においては、政治的な徳を修練し、それを社会のために使用するべきだと主張しているからである。

では、われわれは、このふたつの言葉を、どのように理解したらよいのだろうか。ヒントになるのは、アノニウムス・イアンブリキとの思想的符合の多いデモクリトスの発想である。デモクリトスには、「安定した生を送りたいと思う者は、公私いずれにおいても、多くのことをやりすぎてはならない(DK68B3)」という言葉があり、セネカ(『心の安定について』13.1)は、その意味を、ひとは多くの無意味な仕事をするべきではないということだと解説している。これが正しければ、デモクリトスは、人間のなすべき仕事をめぐり、無意味な仕事と、有意義な仕事の区別をしていたことになる。

アノニウムス・イアンブリキが、このデモクリトスの発想に似た考え方を持っていたのだとしたら、ここでのふたつの語の対比も、同様の含意を持っていた可能性が出てくる。その場合、彼の発言の意図は、エウノミアの社会では、無意味で不快な仕事をしなくてすみ、意味のある仕事に快く専念できるというものであることになるだろう。その場合、公私という対立は重要なものではなく、公的な仕事でも、意味のある重要な仕事であれば、エルガのなかに含まれることになる⁵⁰⁾。

以上の解釈が正しいとしたら、アノニウムス・イアンブリキの真意は、つぎのようなものであることになるだろう。すなわち、アノミアの社会では、社会的安定が失われるため、さまざまな社会的問題が噴出し、人々は、その対処のために、公私にわたって奔走しなければならなくなる。これに対して、エウノミアの社会では、そのような無意味でわずらわしい問題は生じないので、人々は、公私にわたって、有益な仕事に専念することができるのである。

以上のように、アノニウムス・イアンブリキにとって、エウノミアの社会と

は、経済的な安定を基盤にして、社会階層の調和的な関係が実現された社会であったが、彼がそのような社会を理想としたのは、そのような社会でこそ、人々の幸福が実現されるからであった。すなわち、そのような社会においては、人々はみな、公的生活においても、私生活においても、無意味な厄介事から解放されて、意味のある有益な仕事に専念することができ、そうした生活を送ることによって、人々は不安や苦しみから解放され、幸福を手にすることができるのである。

4.2 国家理念

それでは、アノニウムス・イアンブリキの思い描く、エウノミアの実現した理想社会は、どのような政治体制をとる社会なのであろうか。これについては、研究者たちの見解は分かれている。これまで、彼の政治的立場として、保守派、穏健派、寡頭派、民主派など、さまざまな解釈が提示されてきた⁵¹⁾。しかし、断片自体のなかに、彼がなんらかの政治的党派に属していたことを示す発言は存在していないのである⁵²⁾。

この問題について、筆者は、アノニウムス・イアンブリキには、そもそも党派的な意図などなかったのではないかと考える。彼の意図は、特定の政治的立場を支持することにはなく、むしろ、エウノミアの社会が実現するためには、どのような条件が必要であるかを提示することにあつた。そして、すでに明らかになったように、彼の理想とする社会は、あらゆる社会階層の調和が実現し、あらゆる階層に権利と利益が実現した社会なのであり、特定の社会階層の権利と利益が実現した社会ではないのである。彼にとって、党派的対立は、アノミアをもたらす原因であり、なんら望ましいものではなかったはずである。むしろ、彼は、そのような党派的対立がエウノミアによって解消されることによってこそ、本当の理想社会が実現すると思ったのである。

以上が正しければ、アノニウムス・イアンブリキは、特定の党派に属する政治家ではなかったことになるだろう。むしろ、われわれは、彼を、当時の階層

対立や政治的混乱を憂えて、そのような問題が根本的に解消された理想社会を模索した思想家とみなすべきなのである⁵³⁾。

アノニュムス・イアンブリキは、社会の存在理由を、社会を構成する人々の幸福に求め、そうした社会の実現をエウノミアに求めようとした。徳の理論をはじめとする倫理思想も、このようなエウノミアの社会の実現を念頭にしている。すなわち、人間が徳と名声を求めて、法と正義の実現を目指さねばならないのは、エウノミアの実現のためなのであり、そうした調和的な社会においてこそ、徳と名声は、真に善いものとして、人間の幸福に寄与するものとなるのである。

このようなアノニュムス・イアンブリキの政治理念は、ソフィストの伝統のなかでありながら、そこにはおさまらない側面を持つ。彼の思想のなかには、その後、展開されることになるコスモポリタニズムの萌芽が含まれている⁵⁴⁾。ソフィストたちの思想のなかに含意されていた発想が、紀元前5世紀末の状況のなかで、さらに具体化し、伝統的な社会観を超える発想に成長しているのである。それは、その後、紀元前4世紀において、明確な姿をあらわしてくるものであるが、彼の政治思想は、この時期におけるその成長過程を示すものといえるのである。

おわりに

アノニュムス・イアンブリキの思想の意義は、紀元前5世紀末において、ソフィストたちの思想の伝統が忠実に引き継がれながら、時代の変化に連動して、いかに変容していったかを示している点にある。

そこには、徳の修練と教育をめぐる問題が提起され、彼は、伝統的な枠組ののちとって、名声という価値を基盤とした徳の理論を展開している。しかし、そこで彼は、プロタゴラスにおいては萌芽的であった徳の全体と部分をめぐる問題を議論に取り入れ、これを政治的徳と倫理的徳の関係性の問題として考察

した。これは、その後、プラトンが本格的に論じることになる徳の統一性の問題の先駆けとなる議論であるが、アノニウムス・イアンブリキの議論は、政治的徳を超える善の存在を指摘しながら、その善は、徳に外在的なものであった。彼の議論は、ソフィスト的なものでありながら、それを越えていく側面を持っているといえるだろう。

同様のことは、共同体をめぐる問題についてもいえる。彼は、法に従うことを重視した社会倫理を提唱しているが、その正当化もまた、プロタゴラスの社会理論を利用しながら、ノモスとピュシスを結合させるという、新しい視点に基づくものであった。彼は、このような視点から、当時の社会で深刻化しつつあったプレオネクシアの問題を解決しようとしており、その議論もまた、プラトンの先駆けとなるものであった。

さらに、そのようにして実現されるエウノミアの社会についても、彼の社会観は、紀元前5世紀の社会思想の伝統にのっとりながら、当時の社会状況の変化に適応して、経済的な観点から社会的調和を描いており、また、そのようにして提示される理想的な社会のすがたも、コスモポリタニズムを準備するようなものになっていた。

以上のように、アノニウムス・イアンブリキは、紀元前5世紀のソフィストの時代の思想と、その後の新しい時代の思想の連結点とみなすことができる。紀元前4世紀の思想は、紀元前5世紀の思想から断絶したものではない。それは、ソフィストたちの思想の延長線上にある連続的なものなのである。アノニウムス・イアンブリキは、そのような連続性を示す歴史的証拠なのだといえるだろう。

注

- 1) プロトレプティコスとは、哲学の有用性を説き、哲学へといざなうことを目的とした伝統的なジャンルである。イアンブリキの著作も、これにのっとったものである。
- 2) 第6章から第12章までの一連の議論についても、長らく引用元が不明であったが、バイウォーターによって、この部分がアリストテレスの失われた著作『プロトレプティコス』

- からの引用であることが明らかにされ、歴史的発見となっている (Bywater [1862])。
- 3) Hoffmann [2002] は、順序が入れ替えられているとするが、これはアノニムスの議論を倫理的部分と政治的部分に分けようとするホフマンの解釈によるものであり、あえて順序を変更する理由にはならない。
 - 4) この文書に見られるイオニア方言の特徴は、つぎのとおりである。①その語彙には、 $-\tau\tau-$ の代わりに $-\sigma-$ という子音を使用する例が多く見られる (たとえば, $\kappa\rho\epsilon\acute{\iota}\sigma\sigma\omicron\nu$)。②イオニア方言に特徴的な語彙が多数登場する。具体的には, $\epsilon\acute{\upsilon}\lambda\omicron\gamma\omega\varsigma$ (2(2)), $\sigma\mu\iota\kappa\rho\acute{\omicron}\varsigma$ (2(3)), $\acute{\alpha}\mu\phi\iota\beta\acute{\alpha}\lambda\lambda\omega$ (2(4)), $\acute{\omicron}\lambda\iota\gamma\omicron\chi\rho\omicron\nu\acute{\iota}\omega\varsigma$ (2(7)), $\acute{\alpha}\nu\acute{\epsilon}\kappa\lambda\epsilon\iota\pi\tau\omicron\varsigma$ (3(5)), $\acute{\epsilon}\mu\beta\alpha\sigma\iota\lambda\epsilon\acute{\upsilon}\omega$ (6(1)), $\acute{\upsilon}\pi\omicron\delta\acute{\upsilon}\nu\omega$ (6(2)) など。cf. Ciriaci [2011] 69.
 - 5) 具体的には、次のような技巧がみられる。①韻律、押韻、キアズモスなどの使用による技巧的な文飾。②語と語を並列させて対比させる手法。③意味の似た語彙を並列させて対比する手法。④ふたつの対立的な状態 (エウノミアとアノミア) を対比させて描写していく手法。⑤一般には馴染みの薄い特殊な語彙の使用 ($\epsilon\acute{\upsilon}\gamma\lambda\omega\sigma\acute{\iota}\alpha$ (1(1), 3(1)), $\phi\iota\lambda\omicron\phi\upsilon\chi\acute{\iota}\alpha$ (5(1)), $\epsilon\acute{\upsilon}\lambda\omicron\gamma\omega\varsigma$ (2(2)) など)。(たとえば、紀元前5世紀における $\phi\iota\lambda\omicron\phi\upsilon\chi\acute{\iota}\alpha$ の用例は、エウリピデスに2箇所 (fr. 206 Nauck², fr. 156 Austin) と、アリストファネスに1箇所 (*Eq.* 837) あらわれるのみであり、当時は新奇な言葉であったと考えることができる。紀元前4世紀になると、プラトン『ソクラテスの弁明』37c-d, 『法律』944d-e などにも登場するようになり、一般化していったと考えられる。) なお、断片が持つ弁論術的な特徴については、Roller [1931] 88-94が詳しく考察している。
 - 6) これらの弁論術的な特徴の多くは、トゥキユディデスの著作にも共通に見られる特徴である。両者の間には、共通の知的背景が存在していたと考えることができる。cf. De Romilly [1980].
 - 7) 論争の全貌は、Ciriaci [2011] 28-51において詳細に整理されているので、参照されたい。
 - 8) Blass [1889].
 - 9) Gomperz [1912] 85.
 - 10) Wilamowitz-Möllendorff [1893] 174 n. 77.
 - 11) Mayer [1913] 97-9.
 - 12) Mazzarino [1965] 612 n.297.
 - 13) Joël [1901] 673-704.
 - 14) Schmid [1940] 198-203.
 - 15) 最初にヒッピアス説を主張したのは Gomperz [1912] 89-90であるが、その後、Untersteiner [1971] がこの説を復活させた。彼の論拠は、トゥキユディデス (Ⅲ, 84) を根拠とした特殊なものであり、カタウデッラによって批判されたが、その後 Barigazzi [1992] が、その解釈を再評価している。
 - 16) プロタゴラス説を提唱したのは、Töpfer [1907] である。その後、Levi [1941] も、多

- くの影響関係を指摘している。ほかに、プロタゴラス説の支持者として、De Romilly [1979] がいる。
- 17) カタウデッラは、Cataudella [1932] [1937] [1950] の三つの論文において、デモクリトス説を提唱し、その詳細な根拠を提示した。デモクリトスとの関連は、その後、Cole [1961] においても議論されている。
- 18) このほか、ソクラテス・プラトンとアノニウムス・イアンブリキの倫理思想を強く結びつけようとする Gigante [1956] 177-186 の解釈がある。たしかに、Gigante が指摘するように、ソクラテス・プラトンの論点と、アノニウムス・イアンブリキの論点には重なる部分が多い。しかし、アノニウムス・イアンブリキの思想は、すくなくとも、プラトンと同時代のものではなく、むしろプラトンに至る以前の萌芽的なものであるように思われる。
- 19) 代表的な知識人として、トゥキュディデスとアリストファネスを挙げることができる。トゥキュディデスとの影響関係は広汎なものであり、これについては、De Romilly [1980] を参照せよ。アリストファネスとの符合関係としては、彼の喜劇作品のなかに、『プルートス』829-833行、907-915行での財産をめぐる発言や、『騎士』387行以下での僭主の描写など、影響をうかがわせる発言をみることができる。
- 20) これより遅い時期を想定する論者として、Gigante [1956] 177-86, Lacore [1997] 400, Mari [2005] など。これより早い時期を想定する論者として、Mazzarino [1965] 609-10 n. 283 があるが、それ以外は、この時期を支持している。
- 21) DK80B3, Pl. *Prt.* 323c-e.
- 22) Pl. *Prt.* 351b-c, DK68B207.
- 23) Pl. *Prt.* 325c-326e, DK68B183, 294.
- 24) Roller [1931] 9.
- 25) Zeppi [1974] 342, Criaci [2011] 81.
- 26) その証拠として、この解釈では、これらの徳は、議論のなかで、徳とはいえない単なる能力として取り扱われているとしている。すなわち、勇敢さは、3 (1) において、「強さ」と言い換えられており、たんなる身体の優れた性質にすぎないものとして取り扱われている。また、弁舌のうまさについても、2 (7) においては、「言論に依拠する技術」と呼ばれ、短時間で習得できるたんなる技術とされているという。だが、これらの解釈は、いずれも間違っている。まず、勇敢さが「強さ」と言い換えられているからといって、たんなる身体的性質にすぎないと考える必要はない。「強さ」という言葉は、より広い含意を持ち、たんなる自然的性質のみを意味するとは限らないからである。また、この解釈では、「弁舌のうまさ」と「言論に依拠する技術」が同一のものだとみなしているが、そのような解釈自体が誤りであり、両者は別のものであると考えられる。
- 27) Hoffmann [1997] 193-6 は、これらは技術だが、よき目的と結合するとき、徳になると

考える。だが、そのような解釈はテキストが支持しない。

- 28) Roller [1931] 68- は、アノニウムス・イアンブリキの徳理解が、ソクラテスのそれに類似しており、エトスやモラルを含むものだと考えるが、違う。
- 29) 「徳の全体と部分」という表現は、プラトンだけでなく、イソクラテス（『平和について』32）にも登場しており、紀元前4世紀には、一般的な表現になっていたと考えられる。
- 30) たとえば、ゴルギアスの『パラメデスの弁明（DK82B11a）』には、名誉をめぐる発言が多数みられる。同様の論点は、トゥキュディデス（2.42.4）におけるペリクレスの演説にもみることができる。
- 31) ゴルギアス DK82B11a, トウキュディデス2.35.2, ヒッピアス DK86B16, 17, デモクリトス DK68B245など。
- 32) De Romilly [1980], Mari [2003] 172, Ciriaci [2011] 109.
- 33) たとえば、ゴルギアスは、『ヘレネへの賛辞（DK82B11）』（11）において「ドクサはつまづきやすく、不確実」だと述べている。
- 34) 自制力の重視は、この時代の思想家たちに共有される伝統的価値観である。デモクリトス DK68B214, 236, プロディオコス DK84B2, アンティフォン DK87B58, 59, ソクラテス Xen. Mem. 1.2.1. cf. Ciriaci 135-8.
- 35) プレオネクシアをめぐる発言は、アノニウムス・イアンブリキと同時代の諸文書に登場する。とりわけ、トゥキュディデスには、プレオネクシアへの言及が多い。また、トゥキュディデスは、プレオネクシアの思想が引き起こす権力主義的発想にもふれており、たとえば、有名な「メロス対談（5.85-113）」のくだりでは、弱者は強者に従うべきだという発言がみられる。
- 36) *Gorg.* 483b ff.
- 37) *Gorg.* 503d ff.
- 38) Roller [1931] 77-8, Ratte [2008] 6.
- 39) cf. Hoffmann [1997] 304-. さらに、直後の6(2)冒頭にも「自然」という言葉が登場するが、そこでは明らかに人間の自然が問題になっている。
- 40) 「鋼の男」というイメージは、その後、プラトンに影響を与えている。cf. Lacore [1997].
- 41) *Gorg.* 488b-489b. ただし、そこでの反論は決定的なものとはみなされていない。
- 42) プラトンによる批判は、アノニウムス・イアンブリキにおけるソフィスト的解決法とは袂を分かつものである。プラトンは、この時代のソフィストによるプレオネクシア批判の議論を知っており、それを乗り越える視点を提示しようとしたのだと考えられる。
- 43) cf. Andrews [1938], Erasmus [1960]. エウノミアは、ホメロス (*Od.* 17.487) やヘシオドス (*Th.* 901-3) の時代から存在する古い概念であり、ソロンでは、その政治の理念を表す概念として使われている。時代が紀元前5世紀にはいると、理想的な政治体制を示す概念として用いられるようになり、アノミアと対比的に議論されるようになって

いった。

- 44) cf. Roller [1931] 60-65. アテナイでは、ペロポネソス戦争での劣勢を背景に、紀元前411年に寡頭派によるクーデターが起こり、400人の評議員による独裁政権に移行した。その後、民主制が復活するものの、ペロポネソス戦争敗戦後の404年に、30人の寡頭派による独裁政権が成立している。
- 45) cf. Dumont [1971], Fragua [1994].
- 46) cf. Ciriaci [2011] 187.
- 47) cf. Lombardi [1997] [2011].
- 48) cf. Hoffmann [1977], Mari [2005] 139-.
- 49) cf. Zeppi [1974] 350.
- 50) cf. Hoffmann [1997] 313.
- 51) cf. Ciriaci [2011] 180.
- 52) たしかに、彼は僭主制を厳しく批判している（7 (12)-(16)）。しかし、そこで批判されている僭主制は、当時のアテナイにおける政治的党派対立のなかの一派とはいえない。また、彼の発言には、民主派の立場と共通する部分が見られるが、それは、彼が当時の民主制の社会のなかで議論しているからであり、かならずしも、彼が民主派であったことを意味するわけではない。そこまで言うためには、彼の発言のなかに、寡頭派への批判が存在しなければならぬが、そのような発言は存在しないのである。
- 53) cf. Roller [1931] 86-, Hoffmann [1997] 309-, Hoffmann [2002] 156, Ratte [2008] 8.
- 54) pace Zeppi (1974) 350.

本研究は JSPS 科研費25370036 の助成を受けたものです。

文献表

- Andrews [1938] Andrews, A., "Eunomia", *Classical Quarterly*, 32 (1938), 89-102.
- Barigazzi [1992] Barigazzi, A., "Lo Scritto dell'Anonimo di Gamblico: È il *Troikos* di Ippia?", *Prometheus*, 18 (1992), 245-260.
- Blass [1889] Blass, F., "De Antiphonte sophista Iamblichii auctore", *Kieler Festprogramm*, 1889.
- Bywater [1862] Bywater, I., "On a Lost Dialogue of Aristotle", *Journal of Philology*, 2 (1869), 55-69.
- Cataudella [1932] Cataudella, Q., "L'Anonymus Iamblichii e Democrito", *Studi italiani di filologia classica*, 10 (1932), 5-22.
- Cataudella [1937] Cataudella, Q., "Nouve ricerche sull' Anonimo di Giamblico e sulla composizione del Protrepico", *Rendiconti della Classe di Scienze morali, storiche e*

- filologiche dell'Accademia dei Lincei*, 13 n. s. 6 (1937), 182-210.
- Cataudella [1950] Cataudella, Q., "Chi è l'Anonimo di Giamblico?", *Revue des Études Grecques*, 63 (1950), 74-106.
- Ciriaci [2011] Ciriaci, A., *L'Anonimo di Giamblico: Saggio critico e analisi dei frammenti*, Bibliopolis, 2011.
- De Romilly [1979] De Romilly, J., "La Grèce et la formation de la pensée morale et politique", *Annuaire de Collège de France*, 80 (1979), 659-664.
- De Romilly [1980] De Romilly, J., "Sur un écrit anonyme ancien et ses rapports avec Thucydide", *Journal des Savants*, 1980, 19-34.
- Dumont [1971] Dumont, J. P., "Jamblique lecteur des sophistes", in *Le néo-platonisme: actes*, Centre national de la recherche scientifique, 1971.
- Erasmus [1960] Erasmus, H. G., "Eunomia", *Acta Classica*, 3 (1960), 53-64.
- Fraguna [1994] Fraguna, M., "All'origine dell'*Oikonomia*: dall'Anonimo di Giamblico ad Aristotele", *Rendiconti della Classe di Scienze morali, storiche e filologiche dell'Accademia dei Lincei*, Serie 9, Vol. 5 (1994), 551-589.
- Gigante [1956] Gigante, M., *NΟΜΟΣ ΒΑΣΙΛΕΥΣ*, Edizioni Glauk, 1956.
- Gomperz [1912] Gomperz, H., *Sophistik und Rhetorik*, Teubler, 1912.
- Hoffmann [1997] Hoffmann, K., *Das Recht im Denken der Sophistik*, Teubner, 1997 (pp. 290-333, "Der sog. Anonymus Iamblichi")
- Hoffmann [2002] Hoffmann, K., "Der Einzelne und der Staat im Traktat des Anonymus Iamblichi", in *Die Sophistik*, S. Kirste, K. Waechter, M. Walther (Hrsg.), Franz Steiner, 2002, 147-157.
- Joël [1901] Joël, K., *Der echte und der Xenophontische Sokrates*, II 2, Gaertner, 1901, (pp. 673-704, "Excurs: Die scheinbaren Antiphonfragmente bei Jamblichos")
- Lacore [1997] Lacore, M., "L'homme d'acier (ἀδαμάντινος ἀνήρ) de l'Anonyme de Jamblique à Platon", *Revue des Études Grecques*, 110 (1997), 399-419.
- Levi [1941] Levi, A. "L'Anonimo di Giamblico", *Sophia*, 9(1941), 235-346. (D. Viale 名義で掲載)
- Lombardi [1997] Lombardi, M., "Il principio dell'ἐπιμελιξία dei beni nell'Anonimo di Giamblico (Vorsokr. 89, 7, 1-9)", *Rivista di filologia e di istruzione classica*, 125 (1997), 263-285.
- Lombardi [2011] Lombardi, M., "Etica, politica ed economia nell'Anonimo di Giamblico (VS 89, 7, 1-9): Un esempio di ideologia democratica del V o IV sec.?", *Rheinisches Museum für Philologie*, 154 (2011), 129-151.
- Mari [2003] Mari, M., *Anonimo di Giamblico. La Pace e il Benessere*, a cura di D. Musti, BUR, 2003.

- Mari [2005] Mari, M., “L’Anonimo di Giamblico e la riflessione greca sull’economia nel IV secolo a. C.”, *Mediterraneo Antico*, 8 (2005), 119-144.
- Mayer [1913] Mayer, H., *Prodikos von Keos und die Anfänge der Synonymik bei den Griechen*, F. Schönigh, 1913.
- Mazzarino [1965] Mazzarino, S., *Il pensiero storico classico*, vol. 1, Laterza, 1965.
- Ratte [2008] Ratte, C., “La loi dans l’Anonyme de Jamblique”, *Camenuiae* 2 (2008), 1-11.
- Roller [1931] Roller, R., *Untersuchungen zum Anonymus Iamblichi*, Inaug.-Diss. Tübingen, 1931.
- Schmid [1940] Schmid, *Die griechische Literatur zur Zeit der attischen Hegemonie nach dem Eingreifen der Sophistik*, in W. Schmid-O. Stählin, *Geschichte der griechischen Literatur*, 5 Bde. C.H. Beck’sche, 1927-1948, III 1, 1940.
- Töpfer [1907] Töpfer, K., “Zu der Frage über der Autorschaft des 20. Kap. des Iamblichischen”, *Protrepikos, XI. Jahresbericht des Kommunal-Obergymnasiums in Gmunden am Traunsee*, 1907, 3-14.
- Untersteiner [1971] Untersteiner, M., “Un nuovo frammento dell’«Anonymus Iamblichi»: Identificazione dell’Anonimo con Ippia”, in M. Untersteiner, *Scritti Minori*, 1971, 422-439.
- Wilamowitz-Möllendorff [1893] Wilamowitz-Möllendorff, U. von, *Aristoteles und Athen*, vol. 1, Weidmann, 1893.
- Zeppi [1974] Zeppi, S., “Protagora e l’Anonimo di Giamblico”, in *Meschellanea di scritti filosofici in memoria di S. Caramella*, Accademia di scienze, lettere e arti, 1974, 341-359.